まちか

我がまちを語る

望月正己さん

中桁(88歳)

目をみはる発展

伝法地区は、今でこそ家が建ち並び、広い道路もできましたが、私が子供のころは、北部は山林、南部は水田の農業地帯でした。伝法小学校の児童数が四・五百人ぐらいの落ちついた農村でした。

その時分の楽しみといえばお祭りで、五月三日の浅間さん、八月二十三日のお地蔵さん(保寿寺)、お日待ちなどは、そりゃあもう楽しみでした。

市街化は、昭和四十三年に東名高速道路のインターチェンジ、四十五年に市庁舎ができてから進みました。

市庁舎の周辺は、かつて「瓜島のどぶっ田」と呼ばれ、あまりよい場所ではありませんでした。現在の発展した街並みは、昔を知っている者にとって本当に目をみはるものがあります。ただ、反面、農家としては田畑がなくなってきて寂しく感じるときもありますね。

クローズアップ人

県内初のフルートフェスティバルを富士文化センターで開いた

茅原初子さん

新浜(41歳)

人の心を和ます音色のフルート。茅原さんは富士市で唯一のフルートクラブ「ミューズフルートアンサンブル」の代表者で、六月十四日に県内初のフルートフェスティバルを富士文化センターで開きました。

「わからないことだらけ」の状態から一年ごしで計画されたフェスティバルには、約九百人が集まり、まずは成功。入場者全員が、クラッシックから童謡まで幅広い音色を楽しみました。

茅原さんは大阪生まれ、高校時代に吹奏楽部に属しながらも、フルートを手にしたのは十八歳のとき。フルートのすんだ響きにたちまち魅せられ、練習を重ねました。

「フェスティバルはフルートを広める幕あけ、これから底辺を広げたい」と抱負を語ります。

普段は四人家族のれっきとした主婦。幼稚園のマーチングバンドも指導するなど多忙で「私の奥さんだれかいないかしら」と独り言。

あの人・この人・こんなこと

カブスカウトを二十年

鈴木節子さん(吉原上中町)

カブスカウトのリーダーとしてもうすぐ二十年目を迎える鈴木節子さん。関係者の間では「カブの節ちゃん」と呼ばれ、かなり有名。

持ち前のファイトと明るさで、現在、女性では日本に四人しかいないリーダーの養成者となっています。「夏は野外活動の季節。ボーイスカウトでの自然体験はすばらしいですよ」とニッコリ。

ハーモニカ人生

遠藤紀男さん(田端)

三歳から始めたハーモニカ。小さいころは、練習がつらくて家出したこともあるそうですが、昭和四十八年、国際コンクールで二位に入賞。「ハーモニカは、簡単なようで奥が深い。日本の民族楽器だと思っています」とハーモニカに対する愛情は人一倍。遠藤さんは今、編曲、作曲、演奏会、講演会と多忙な毎日を送っています。

お化け屋敷に来てネ

伝法青年会

「エキサイティング青年、チャレンジ87」がスローガンの伝法青年会は、八月二日に伝法公民館で「お化け屋敷」を開きます。暗幕を張り、自分たちで刈ってきたアシで飾りつけをするという力作です。

お化けもフランケンシュタインから素顔でも十分のお化け(?)までゾクゾクッとすること間違いなし。皆さんお誘い合わせてどうぞ。